

重田園江先生

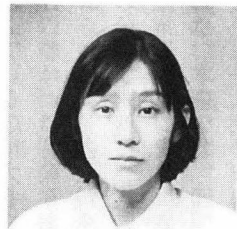
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 正樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12500

重田園江先生

一九九九年四月から、現代思想講座担当の専任講師として、重田園江先生をお迎えすることになった。以下、ここでは、重田さんと呼ばせて頂く。重田さんは、一九九〇年三月に早稲田大学政治経済学部政治学科を卒業された。学部では、わが国における政治哲学、政治思想研究のメッカというべき、故藤原保信教授のゼミで勉強された。卒業後、日本開発銀行に就職されたが、まもなく退職して、駒場の東京大学大学院総合文化研究科相関科学専攻修士課程に進学され、さらに博士課程に進まれて、一九六七年まで在籍された。大学院では、初め長尾龍一教授（法哲学）の指導を受けられたが、同教授は極めてリベラルで、自分の希望する通りの勉強が出来た由である。同教授が定年で日大に移られたあとは、ブルードンの政治思想を専門とする

森政稔助教授の指導を受けられた。それと平行して、十年近く、河合塾で添削のお仕事を続けてこられた。

重田さんの専攻領域は、フランスの哲学者で、いわゆるポスト・モダンの潮流の中心を占めた故ミシェル・フーコーの思想である。フーコーの思想は、難解であるが、私のように現代ドイツの政治外交史を学ぶ者にとつて興味深いのは、フーコーが、一九三〇年代半ばのドイツに起源を有し、戦後、西ドイツの経済的復興を支える理論となったオルド自由主義について、講義で徹底的な分析を試みたという事実である。オルドとは、英語の「オーダー」の語源であり、秩序を意味するラテン語である。オルド自由主義は、フライブルク学派とも呼ばれるように、フライブルク大学がその中心であった。戦後、まだ連合国の占領下にあったバイ



エルン州で経済相となり、一九四九年、西ドイツの経済相に就任して、「奇跡の復興」をもたらしたといわれるルードヴィヒ・エアハルトも、もとは大学の教授であり、この学派に属する。エアハルトは、一九六三年に西ドイツの首相に就任するが、首相としてはあまりすぐれたリーダーシップを発揮していない。戦後の西ドイツの歴史の中で彼の果たした役割は、オールド自由主義の経済理論である「社会的市場経済」の理論を経済相として実地に適用して、巨大な成功を収めたことにある。この理論は、西ドイツの経済復興をもたらしたばかりでなく、国家としての西ドイツの政治と経済の根幹を形成したといってもよいであろう。フリーコーが、オールド自由主義に強烈な関心を寄せたのは、西ドイツという国家がどのような原理によって運営され、統治されたのかを解明し、さらに、一般化して、統治の原理そのものを解明しようとしたからではないかと考えられる。

いづれにしても、フリーコーとオールド自由主義との関係には、まだほとんど誰も注目していないように思われる。その中であつて、重田さんは、パリにおもむいてコレージュ・ド・フランスでのフリーコーの講義のテ

ープを入手され、いちはやくその内容を「自由主義の統治能力 ミシェル・フリーコーのオールド自由主義論」というすぐれた論文にまとめ、一九九六年に発表しておられる。

ところで、このフライブルク学派にもつとも強い影響を与えたのは、一九六二年から六七年までフライブルク大学教授でもあつたフリードリッヒ・ハイエクである。ハイエクともつとも親しかった日本人は、田中清玄氏であつた。ハイエクがもうひとりの経済学者のミュールダールや、ロシアの文学者ソルジェニツインとともにノーベル賞を受賞したとき、スエーデン国王主催の晩餐会のメーン・テーブルに招かれた日本人は田中氏ただひとりであつたという。同じく『田中清玄自伝』（文芸春秋、一九九三年）によれば、田中氏は、生物の「棲み分け理論」を打ち建てた京都大学の今西錦司教授とハイエクとの討論会を、京都で一九七八、八一、八三年の三度設営した。この討論会は、うまく噛みあわなかつたようであるが、新進の重田さんに、フリーコー、エアハルト、ハイエク、今西錦司、さらには田中清玄などの関連を解明して頂ければ面白いことになる」と期待される。田中清玄氏といえば、戦前の日

本共産党の有力な指導者のひとりであり、戦後は中東諸国の国王たちとの太い人脈で注目された、一筋縄ではいかぬ人物である。

一九六八年二月生まれの重田さんは、まだ三一歳の若い研究者であるが、教育にも大変熱心で、重田さんの講義は、出席はとらないと宣言したにもかかわらず、出席者が減っていない。二部の講義では、初めはごく少数の学生しか出ていなかったが、途中から倍増し、今はさらにその倍になったということである。学生が一番興味をもつのは、主人とどうして知合うようになったか、ということですが、とやがて笑っておられる。その理由は至って簡単明瞭で、重田さんがアルバイトをしておられた河合塾で、東大文学部東洋史学科ご出身の重田氏は、専任として小論文の指導を担当して今日に至っておられるからである。同僚としてはずっと以前から知っていたが、結婚したのは三年前です、と言われる。昨年五月に、ご長男が誕生された。現代思想のご講義では、目下、丸山真男氏の論文「歴史意識の『古層』」をとりあげておられる。そのあと、デカルトに始まる近現代ヨーロッパの哲学、とくにヨーロッパの政治哲学の系譜を二〇世紀を中心に論じてゆかれ

るご予定のようである。いま出版界では「第二の丸山ブーム」といわれ、丸山真男氏の著作が、座談の記録に至るまで、書店にあふれかえっている昨今であるが、学生はほとんど丸山真男を知らないらしく、講義には苦勞されておられるようである。重田さんは、極めて博識であり、学生諸君も多くを学んでほしいものである。

いずれにしても、重田さんが、我が政治経済学部に新風を吹き込むことは、期して待つべきものがある。明るく、ユーモアとウィットに富むお人柄は、同僚の先生がたからも、学生からも親しまれるにちがいない。良い方をお迎え出来たと心から思う。

三宅 正樹